

つれづれなるままに 第9号

令和元年7月29日（月）発行



校長 深谷 浩一

国保監督（大船渡），苦渋の決断！ ～佐々木投手の故障を憂慮～

今年の高校野球茨城県大会は、霞ヶ浦と常磐大高との間で決勝戦が行われ、霞ヶ浦が14対0で勝利し、甲子園への切符を手に入れました。3回戦で本校に勝利した、大会二連覇中の土浦日大は4回戦で水城高校に敗れ、三連覇の夢は潰（つい）えてしまいました。

ところで、霞ヶ浦の優勝を伝えた同じ日（7月26日（金））、新聞は、岩手大会の決勝戦の様子を伝えていました。岩手大会では、大船渡高校の佐々木朗希投手が最速163キロの球速で注目を集めていましたが、国保陽平監督は、花巻東高校との決勝戦に、「故障を防ぐこと」を優先して佐々木投手を登板させなかったのです。

そのあたりの状況について、手元の新聞記事から事実を探ってみましょう。



岩手大会決勝で花巻東に敗れ、グラウンドに一礼する大船渡・佐々木（左から2人目）ら＝岩手県営野球場

「全国高校野球選手権大会岩手大会の決勝が25日に行われ、大船渡の国保陽平監督が、故障の防止を理由に全国屈指の実力を持つ佐々木朗希投手（3年）を出場させなかった。

甲子園という夢と、将来を考えた起用法を両立させることの難しさが、浮き彫りとなった。佐々木投手は、24日の準決勝で129球を投げて完封。国保監督は、試合間隔や気温の高さなどを要因に挙げ『甲子園という素晴らしい舞台が、決勝に勝ったら待っているのは分かっていたが、今までの3年間の中で一番壊れる可能性が高いと思い、私には（起用するという）決断ができませんでした』と語った。

（7月26日付け茨城新聞第8面の記事より。）国保監督は『一生心に残るような決断は、自分で引き受けようと思った』と、選手には相談しなかったという。佐々木投手は『監督の判断なのではないか』と理解を示しつつ『高校野球をやっている人は、試合に出たいと思うのは当然のことだと思うので、投げたいという気持ちはあった』と無念の色を隠せなかった。

投手の故障予防をめぐるのは、日本高野連が4月に有識者会議を発足させ、6月の第2回会合で、全国大会で一定の日数の中で投げられる球数を制限することを答申に盛り込むことを決めた。国保監督は問題視されている過密日程については『私は発言する立場にはない』と述べた。（7月26日付け茨城新聞第8面より。）

大船渡高校にはその後、監督の采配に対する批判の電話やメールが殺到したそうですが、さて、皆さんは今回の監督の判断や対応をどう考えますか。

「国保監督、あっぱれ！」しかしそれ以上に・・・

日本高野連が「全国大会で一定の日数の中で投げられる球数を制限する」方向で検討していることは、選手の故障を未然に防ぐという意味では望ましい方向だとは思いますが、一方でそんなルールがない現状では、国保監督のように「自分で引き受けよう」という覚悟を持つことは難しいのではないかと思います。しかも、「この試合に勝てば甲子園」という状況の中で「投げさせない」という責任を自分ひとりで背負うことは並大抵のことではないと思われれます。今回国保監督に対する批判や非難を見ても、それは明らかでしょう。

それでも佐々木投手を登板させなかったのは、これまでの指導の中から導かれた信念に基づく判断で「あっぱれ！」というほかありません。しかしそれ以上に「あっぱれ。」なのは、監督から投げさせないと聞かされても、「そうですか。」と冷静に受け止め、「監督の判断なのではないか。」と考え、その判断に素直に従った佐々木投手です。さらに、佐々木投手は、「投げさせない」という監督の決断に対して「すごくありがたいことだと思うし、自分も将来活躍したいと思う。」（7月26日付け茨城新聞第8面より。）と答えているのです。佐々木投手には、秋のドラフトでたくさんの手が挙がることを心から期待しています。

